

大東文化大学 東洋研究所所報

2019.7 No.71

目次

【新元號に寄す】中國文學科教授 中林 史朗……………1	2019年度 研究所 名簿……………9
2019年度 東洋研究所共同研究課題……………2～3	新刊案内……………10
2018年度 東洋研究所共同研究班活動報告……………4～7	2018年度 発行 「東洋研究」……………11
〔国際交流講演会〕日本でのハラールの状況 大東文化大学非常勤講師 ムハマド・ズベル……………8	2019年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ……………12

【新元號に寄す】

中國文學科教授 中林 史朗

平成31年4月1日に、5月1日からの新元號が「令和」と發表された。『萬葉集』巻第五梅花歌三十二首序文の「于時初春令月、氣淑風和」から採取されたと傳へるが、更に時代を遡れば、中國後漢時代の天文學者張衡の「歸田賦」（『文選』や『藝文類聚』に採取）の「於是仲春令月、時和氣清」と有るのが、言葉自體の原典と言えるであろう。

又少数ではあるが、「大伴旅人は張衡に想いを馳せていた」との意見も有る。假にそうであるならば、都から遠く離れた九州の太宰府に在って、梅の宴を開いた大伴氏の心情は、同じ言葉こそ無いものの、寧ろ張衡の「温泉賦」（『藝文類聚』に採取）の「陽春之月、百草萋萋、余在遠行、顧望有懷」に通ずるものが有ったやも知れぬ。

しかし、其れは其れとして熟語としての「令和」は、寡聞にして殆ど聞いた事が無い。確かに『爾雅』の釋詁に「令、善也」と有り、「令」には「善い・優れた」の意味（令名・令日等）が有り、「和」にも「やわらぐ・なごやか」の意味（平和・調和等）が有り、個々の漢字としては、其れ成りに良い意味合いが有る。亦た元號を熟語として見た場合、「明治（易經）」は「明にして治む」、「大正（易經）」は「大いに正し」、「昭和（書經）」は「昭らかにして和す」、「平成（書經）」は「平にして成る」と、各々其の時代に馳せた人々の思いが何となく感じられる。では「令和（萬葉集）」はどうであろうか、「令和」を「良い和・立派に和す」と解すれば、良くない和が有るのか、と言う事に成り、出典の事例を無視して「令もて和す」とか「和せしむ」と解すれば、何か上から目線言葉の様に感じられる。

確かに「令和（れいわ）」は、読み易く書き易い點は、肯首し得る。だが意味は如何であろうか。外務省は「beautiful harmony（美しい調和）」と定めたと聞かすが、不整合の調和（an balance harmony）も無くはない。亦た「令」は音通で、「伶」「飴」「零」には通じるが、如何に音が同じとは雖も、「令、麗也」とか、意味的に「令、美也」とか言う解釋は、未だ文獻上に於いて其の用例を見た事が無い。一體何に依據して「令」を「麗しい・美しい」と解釋するのか、些か解釋的飛躍さが見られる。

然りと雖も、高名な學識者に因って考案された新元號であれば、この際暫く出典や事例の事は忘れて、「令」の字自體に就いて考えると、『廣雅』の釋詁に「令、完也」と有る。然らば、「令和」を「和を完うする」と解してみよう。さすれば戦後の元號は、「昭和」で「平和を昭らか」にし、「平成」で「其の平和が成り」、「令和」で「其の平和を完う」するとなり、一貫して「平和」が、人々の念頭に在る事に爲る。因って「令和」の意味は、「put through peace（平和の貫徹）」で、一應目出度し目出度しと言えよう。

本東洋研究所も、昭和36年以來、昭和・平成・令和と發展し續けて來ている。斯く有れば、「令和」の新時代に在っては、昨今の如き人文學的研究を輕視する風潮の中で、其れこそ刮目に値す可き、研究所の更なる「飛躍的活躍」と、研究員間相互の「美しい調和」とを見させて頂けるものと、本年度を以て退任する身は、固く信じて疑わないのである。

2019年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	中華人民共和国 100 年史研究—日中関係の今後を見据えて
	期間 2019～2021 年度（新規）
	<p>メンバー（18名） 團岡崎邦彦〔主任〕 団村井信幸、篠永宣孝、田中寛、齊藤哲郎、柴田善雅、鹿錫俊、高田茂臣 団伊藤一彦、上野英詞、植松希久磨、嶋重弥子、由川稔、鏡屋一、江崎隆哉 小島麗逸、近藤邦康、中島宏</p> <p>概要 研究計画は3年間の短期計画（2019～2021）と10年をかけた長期計画（2020～2030）から構成される。計画では、日中関係を含む「中国共産党 100 年史年表」（1921～2020）、および「中華人民共和国 100 年史年表」（1949～2048）の二つの百年史年表を研究、整理し、さらに公刊に向けて準備する。</p> <p>まず、中華人民共和国建国以前の歴史と日中関係について様々な分野から整理し、戦後日中関係において引き継がれた課題を明らかにする。さらに、中華人民共和国建国後については、これを毛沢東の時代（1949～1976）と鄧小平の時代（1978～2012）、そして習近平の時代（2012～）に分け、それぞれの内政、外交、日中関係について整理していく。ここでは毛沢東の「社会主義の道」、鄧小平が提起した「特色ある社会主義と改革開放」、さらに習近平のめざす「中国の特色ある社会主義の新时代」構想、その政策の連続性と問題点について検討する。特に、習近平の中国の「中華振興」、「一路一帯」にみる世界認識と覇権主義、さらに国内における民衆の自由、民主の要求と共産党政治の問題点を明らかにする。</p> <p>なお従来からのテーマ、20世紀、21世紀の中国の対外抵抗、対内改革と日本についての研究を継続させ、日中間であらたな世界秩序を創造していくモデルを考えていく。</p>
第2班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心に—
	期間 2017～2019 年度（研究期間中）
	<p>メンバー（11名） 団中林史朗〔主任〕 團田中良明 団浜口俊裕、小塚由博、高橋睦美、宮瀧交二、藏中しのぶ、団芦川敏彦、成田守、小林敏男、日吉盛幸</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。</p> <p>それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。</p> <p>その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。</p>
第3班	西欧植民地主義再考
	期間 2017～2019 年度（研究期間中）
	<p>メンバー（6名） 團山田準〔主任〕 団滝口明子、齋藤俊輔 団岡倉登志、生田滋、出田恵史</p> <p>概要 西欧植民地主義の成立、発展、思想的背景については数多くの研究がなされて来た。</p> <p>これら西欧植民地主義の歴史研究はヨーロッパと新大陸つまり大西洋世界、ヨーロッパと旧大陸つまりインド洋と太平洋世界を対象とし、それとは別に植民地宗主国の歴史研究が存在した。これら大西洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からはインド洋と太平洋世界における植民地主義が見えてこない。逆にインド洋と太平洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からは、大西洋世界の植民地主義は見えてこない。</p> <p>そこでこの研究班では、大西洋世界、植民地宗主国、インド洋と太平洋世界の3大研究対象を比較統合し、西欧植民地主義を再考することを目的に、いくつかの個別的研究を分担して研究しようとするものである。</p>
第4班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	期間 2019～2021 年度（継続）
	<p>メンバー（12名） 團小林春樹〔主任〕、田中良明 団渡邊義浩、小坂真二、小林龍彦、中村聡、中村士、細井浩志、山下克明、進藤英幸、濱久雄、高橋あやの</p> <p>概要 前田尊経閣文庫にのみ現存する貴重な逸存書である『天文要録』（唐・李鳳撰）の巻五「月占」の巻頭から訓読、訳注作業をおこない、研究最終年度にその成果を公刊する。</p>
第5班	茶の湯と座の文芸
	期間 2017～2019 年度（研究期間中）
	<p>メンバー（14名） 団藏中しのぶ〔主任〕、藏田明子 団相田満、安保博史、矢ヶ崎善太郎、三田明弘、高木ゆみ子、フレデリック・ジラル、王宝平、オレグ・ブリミアニ、菅野友巳、笹生美貴子、松本公一、布村浩一</p> <p>概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008（H20）～2017（H29）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻十注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。</p>

第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—
	期間 2018～2020年度（研究期間中）
	メンバー（13名） 団吉村武典〔主任〕 団山田準 団原隆一、鈴木珠里、南里浩子、林裕、斎藤正道、中村菜穂、吉田雄介、アブドリ・ケイワン、石井啓一郎、ソレマニエ貴実也、深見和子
第7班	概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域にまたがり、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺の文化圏が持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与つづけて来た。 本研究では、第2期まで行ってきた、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。 第2期までに行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していき、研究成果の公表を積極的に行っていく。
	岡倉天心（覚三）にとつての「伝統と近代」
	期間 2018～2020年度（継続）
第8班	メンバー（8名） 団田辺清〔主任〕 団宮瀧交二、篠永宣孝 団池田久代、岡倉登志、岡本佳子、依田徹、佐藤志乃
	概要 岡倉天心（1862-1913）は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を志した。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。 この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、皇室技芸員選択委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を志して美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、「日本の覚醒（かくせい）」（1904）、「茶の本」（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。 岡倉天心研究はまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。
	南アジア社会における包摂と排除
第9班	期間 2018～2020年度（研究期間中）
	メンバー（12名） 団須田敏彦〔主任〕 団篠田隆、石田英明、井上貴子、小尾淳、J・アバイ 団片岡弘次、ムハマド・ズベル、石坂晋哉、舟橋健太、鈴木真弥、増木優衣
	概要 多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、社会を構成する多様な集団間の統合とアイデンティティをめぐる関係も変化し、その結果、基本的な人権や国民が平等に享受すべき諸種の権利から「排除」(Exclusion)される個人や集団が生じている。他方、この排除の現実を踏まえたうえで、多様な集団間の統合とアイデンティティの強化、すなわち「包摂」(Inclusion)を求める政治経済社会運動も展開している。 本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周辺に位置付けられてきた集団を対象として、彼らと社会変動との関わりを「包摂」と「排除」の観点から分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索し「包摂」を求めてきたのか、彼らに対してどのような「排除」の仕組みや圧力が働いてきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。 なお、研究班内部における学内外の研究者との研究交流を活性化させ、研究テーマをより深く掘り下げるために、2019年度から6名の新任の研究分担者が加入する。
明清の文言小説と文人たち—張潮『虞初新志』訳注—	
第9班	期間 2019～2021年度（新規）
	メンバー（5名） 団小塚由博〔主任〕 団田中良明 団小川陽一、今井秀和、荒井礼
	概要 清初の文人張潮が編纂した文言小説集『虞初新志』を訓読し、現代日本語に翻訳し、注釈等を施す。『虞初新志』には全20巻、150作品が収められている。 明から清にかけて、「虞初」の名を冠した小説集が複数編纂されたが、とりわけ本作品は過去（六朝・唐等）の作品を集めたのではなく、同時代の人物の作品を集めたことが大きな特徴的である。彼らは編者張潮の友人・知人が多く、彼の交遊関係が大きく影響している。 また、本作品は中国だけではなく、日本にも江戸時代中期以降に伝来し、和刻本が刊行されており、日本文学との関係も見られる。 3年間の成果としては分量の都合上、そのうち3巻（自序・凡例・跋文を含む）を対象とする。

2018年度 東洋研究所共同研究班活動報告

20世紀・22世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同									
研究班の活動									
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数					
1	※小島麗逸 「中国経済研究会」との合同研究会 「2017年の中国企業の対台湾投資について」(嶋 亜弥子) 「建国後の中国の政治」(岡崎邦彦) 「再論・新疆における地方民族主義—民族自決権の解釈を手がかりとして」(松本和久) 「最近の朝鮮半島問題について」(伊藤一彦)	6月16日	大東文化会館K403 大東文化会館K401	20名					
2	※小島麗逸 「中国経済研究会」との合同研究会 「中国の“一帯一路構想”(BRI)が内包する“債務の罠(debt trap)”の実情について—インド洋沿岸諸国の港湾の事例から—」(上野英詞)	7月21日	大東文化会館K401	18名					
3	「中国の国際金融への進出」 「『一帯一路』政策下の外国語研究と教育の実態—タイ語学研究与教育を中心に」(田中 寛)	12月8日	大東文化会館K401	16名					
4	「現代中国における革命と伝統—文化大革命と柳宗元・李白・杜甫」(鏡屋 一) 「中国滞在報告—北京、山西省(太原、臨汾)、哈爾濱」(スライドで説明)(田中 寛)	12月15日	大東文化会館K401 大東文化会館K402	16名					
5	「2019年度からの中国班研究計画—中共100年史研究と年表」(岡崎邦彦)	3月16日	大東文化会館K301	10名					
所属研究員の活動									
No.	学会等での発表								
1	篠永宣孝 日時 2018年11月3～4日 場所 日仏会館 参加者 約300人 テーマ 「ポール・クロードルと日本(ポール・クロードル生誕150年記念シンポジウム)」								
2	田中 寛 日時 2019年3月11～17日 場所 大連・旅順 テーマ 大連外国語大学日本語学院の招聘により国際シンポジウム「植民地教育史研究」に参加・講演								
No.	刊行物等								
1	篠永宣孝 (1)「彫金家岡部昭における『伝統と革新』」、『鵬』第7号(岡倉天心研究会「鵬の会」会誌)(2018年12月発行) (2)「駐日大使ポール・クロードルと仏領インドシナ問題—クロードルのパリ銀行へのアプローチを中心に—」、『大東文化大学紀要 第57号<社会科学>』(2019年3月)								
2	田中 寛 (1)「高橋和巳の文学と思想 その〈志〉と〈憂愁〉の彼方へ」編著、コールサック社(2018年) (2)「曠野と殉教 新説:高橋和巳論」単編著、(2019年) (3)「戦争・言語文化・記憶 植民地教育史研究の視点から」、(2019年) (4)「文学作品にみる日中戦争下の“言語接触”—戦場の中の言語と感情—」、『大東文化大学教職課程センター紀要 第3号』(2018年9月) (5)「高橋和巳:現代日本知識人の課題(翻刻・転写)」、『大東文化大学紀要 第57号<人文科学>』(2019年3月) (6)「中国大陸における日本語の普及—朝日新聞外地版にみる実相—」、『新世紀人文学論究 第2号』(新世紀人文学研究会 2018年10月)								
日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—									
研究班の活動									
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数
1	『藝文類聚』巻48 訓読	4月21日	東洋研共同研究室	9名	7	『藝文類聚』巻49 訓読	10月20日	東洋研共同研究室	7名
2	『藝文類聚』巻48 訓読	6月2日	東洋研共同研究室	8名	8	『藝文類聚』巻49 訓読	11月24日	東洋研共同研究室	7名
3	『藝文類聚』巻48 訓読	6月30日	東洋研共同研究室	8名	9	『藝文類聚』巻50 訓読	12月22日	東洋研共同研究室	9名
4	『藝文類聚』巻48 訓読	7月21日	東洋研共同研究室	6名	10	『藝文類聚』巻50 訓読	1月26日	東洋研共同研究室	8名
5	『藝文類聚』巻48 訓読	9月1日	東洋研共同研究室	7名	11	『藝文類聚』巻50 訓読	2月23日	東洋研共同研究室	6名
6	『藝文類聚』巻49 訓読	9月29日	東洋研共同研究室	5名	12	『藝文類聚』巻50 訓読	3月30日	東洋研共同研究室	8名
No.	研究成果物(刊行物等)								
1	『藝文類聚(巻四十七) 訓讀付索引』(2019年2月25日発行)								
西欧植民地主義再考									
研究班の活動									
No.	研究会								
1	①日時 7月30日(月)11時半～14時 ②場所 ビッグエコー成増店 ③参加者 出田恵史・滝口明子・齋藤俊輔・山田 準 4名 ④発表者 出田恵史 ⑤テーマ 新任予定として研究班における担当分野について ⑥その他 各自研究状況報告と来年度活動予定、来年度秋の公開講座担当と内容の打合せ。Lineによる研究グループの作成について								
2	①日時 12月21日(金)16時半～19時 ②場所 ビッグエコー成増店 ③参加者 滝口明子・齋藤俊輔・山田 準 3名 ④発表者 山田 準 ⑤テーマ 植民地主義再考における多文化共生について。 ⑥その他 来年度秋の公開講座担当分担を齋藤俊輔・滝口明子・山田 準として、講義内容の打ち合わせ。								

所属研究員の活動										
No.	学会等での発表									
第3班	1	齋藤俊輔 日時 2018年9月7日 場所 板橋区役所人材育成センター 参加者 7名 テーマ 「群馬県大泉町における多文化共生」 内容 群馬県大泉町における多文化共生政策とブラジル人コミュニティの実情についての報告 その他 地域デザインフォーラム定例会における報告齋藤俊輔 日時 2018年10月15日 場所 大東文化大学語学教育研究所 参加者 10名 テーマ 「群馬県大泉町における住民の多国籍化とまちづくり」 内容 群馬県大泉町における外国人コミュニティを活用した観光推進事業の実態と意義を再検討 その他 大東文化大学語学教育研究所第2回研究発表会								
	No.	刊行物等								
	1	齋藤俊輔 書名 「板橋区の多文化共生をめぐる現状と課題（地域デザインフォーラム・ブックレットNo.27）」 概要 板橋区における多文化共生の現状について考察するとともに、静岡県浜松市と群馬県大泉町の事例を比較して、政策提言を行っている 出版社等 大東文化大学地域連携センター 発行年月 2019年3月1日 その他 大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編（担当章は第4章と第5章）								
No.	その他									
1	齋藤俊輔 ・講演モデレーター 「群馬県大泉町におけるブラジル人コミュニティの実像（NPO法人国際教育技術普及センター高野祥子）」、地域デザインフォーラムシンポジウム、2018年9月19日、大東文化会館 ・市民講座 「魅力ある多文化都市をつくるー外国人集住日本一のまち大泉町での経験から」、大東文化大学連携講座「板橋の魅力を伝える もてなし英語（中級）」、2019年1月15日・18日、板橋区役所人材育成センター									
唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）										
研究班の活動										
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数	
1	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	4月14日	東洋研共同研究室	3名	4	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	7月14日	東洋研共同研究室	4名	
2	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	5月26日	東洋研共同研究室	4名	5	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	11月17日	東洋研共同研究室	3名	
3	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	6月9日	東洋研共同研究室	3名	6	『天文要録』巻4「月占」訳注原稿完成作業	12月15日	東洋研共同研究室	4名	
No.	研究成果物（刊行物等）									
1	『天文要録』の考察 〔三〕（2019年2月25日発行）									
所属研究員の活動										
No.	刊行物等									
1	山下克明 ・『発現陰陽道』（梁暎奔 訳）、著者の旧著である『陰陽道の発見』（NHKブックス、2,010）の中国語訳（社会科学出版社・北京、2019年3月）									
2	中村 士 ・『古代の星空を読み解くーキトラ古墳天文図とアジアの星図ー』、所謂キトラ古墳の星図を東アジアの古代天文学の観点から検討した研究書（東京大学出版会 2019年12月）									
茶の湯と座の文芸										
研究班の活動										
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数	
1	『茶譜』巻十一（上）1 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	4月10日	板橋校舎 1-0508	12人	17	『茶譜』巻十一（上）6 検討（三田・北井・プリミアニ・楊世瑩・郭凱晟）	7月24日	板橋校舎 1-0508	11人	
2	『茶譜』巻十一（上）1 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	4月17日	板橋校舎 1-0508	13人	18	『茶譜』巻十一（上）7 検討（三田・北井・プリミアニ・楊世瑩・郭凱晟）	9月18日	板橋校舎 1-0508	13人	
3	『茶譜』巻十一（上）1 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	4月24日	板橋校舎 1-0508	13人	19	『茶譜』巻十一（上）7 検討（三田・北井・プリミアニ・楊世瑩・郭凱晟）	9月25日	板橋校舎 1-0508	13人	
4	『茶譜』巻十一（上）3 検討（松本・安保・加藤・布村・菅野）	4月28日	池坊短期大学 洗心館第二会議室	5人	20	『茶譜』巻十一（上）8 検討（三田・北井・プリミアニ・楊世瑩・郭凱晟）	10月2日	板橋校舎 1-0508	13人	
5	『茶譜』巻十一（上）1 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	5月1日	板橋校舎 1-0508	11人	21	『茶譜』巻十一（上）9 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	10月9日	板橋校舎 1-0508	12人	
6	『茶譜』巻十一（上）2 検討（相田・飯島・矢ヶ崎・藏田・郭崇）	5月8日	板橋校舎 1-0508	13人	22	『茶譜』巻十一（上）9 検討（佐藤・笹生・高木・楊亜麗）	10月16日	板橋校舎 1-0508	12人	
7	『茶譜』巻十一（上）2 検討（相田・飯島・矢ヶ崎・藏田・郭崇）	5月15日	板橋校舎 1-0508	13人	23	『茶譜』巻十一（上）10 検討（相田・飯島・矢ヶ崎・藏田・郭崇）	10月23日	板橋校舎 1-0508	14人	
8	『茶譜』巻十一（下）18 検討（矢ヶ崎・相田・飯島・藏田・郭崇）	5月20日	同志社大学 良心館 RY436	8人	24	『茶譜』巻十一（上）10 検討（相田・飯島・矢ヶ崎・藏田・郭崇）	11月12日	板橋校舎 1-0508	11人	

第5班	9	『茶譜』巻十一(上)4の検討(三田北井・プリミアニ・楊世瑾・郭凱晟)	5月29日	板橋校舎 1-0508	14人	25	『茶譜』巻十一(上)11 検討(松本・安保・加藤・布村・菅野)	11月13日	藏中研究室	10人
	10	『茶譜』巻十一(上)4 検討(三田北井・プリミアニ・楊世瑾・郭凱晟)	6月5日	板橋校舎 1-0508	12人	26	『茶譜』巻十一(上)12 検討(相田・飯島・矢ヶ崎・藏田・郭崇)	11月19日	藏中研究室	12人
	11	『茶譜』巻十一(上)5 検討(佐藤・笹生・高木・楊世麗)	6月12日	板橋校舎 1-0508	13人	27	『茶譜』巻十一(上) 校正	1月28日	藏中研究室	13人
	12	『茶譜』巻十一(上)5 検討(佐藤・笹生・高木・楊世麗)	6月19日	板橋校舎 1-0508	11人	28	『茶譜』巻十一(上) 校正	2月6日	藏中研究室	13人
	13	『茶譜』巻十一(上)5 検討(佐藤・笹生・高木・楊世麗)	6月26日	板橋校舎 1-0508	11人	29	『茶譜』巻十一(上) 校正	2月12日	藏中研究室	13人
	14	『茶譜』巻十一(上)6 検討(三田北井・プリミアニ・楊世瑾・郭凱晟)	7月3日	板橋校舎 1-0508	13人	30	『茶譜』巻十一(上) 校正	2月15日	藏中研究室	13人
	15	『茶譜』巻十一(上)6 検討(三田北井・プリミアニ・楊世瑾・郭凱晟)	7月10日	板橋校舎 1-0508	13人	31	『茶譜』巻十一(上) 校正	2月18日	藏中研究室	13人
	16	『茶譜』巻十一(上)6 検討(三田北井・プリミアニ・楊世瑾・郭凱晟)	7月17日	板橋校舎 1-0508	10人					
No.	刊行物等									
1	『茶譜』巻十一(上)注釈(2019年2月26日発行)									
西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 ～イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境～										
研究班の活動										
No.	研究会	担当者	開催日時	開催場所	参加人数					
1	・「イランとエジプト：建築史からみえるもの」 ・「大野盛雄 フィールドワークの軌跡Ⅱ —1960年代と1970年代のイラン・アフガニスタン農村調査から—」出版報告	深見奈緒子(日本学術振興会) 原 隆一(大東文化大学) 南里浩子(東京国際大学)	5月20日	大東文化会館	14名					
2	・「エジプト・カイロにおける公園緑地空間の変容に関する研究 —エズベキーヤ・ガーデンを事例として—」 ・「カーニャール朝(1796-1925)における都市化と文化的変化がテヘランの住宅設計と建築様式に与えた影響」 ・「歴史的イスラーム都市の公共空間 : 前近代カイロのサビール・クッターブを中心として」 ・「詩人の見たテヘランゼルス —ナーデル・ナーデルブル晩年の詩作に関する予備的考察」	麻田亜澄真(筑波大学・院) ソレマニエ貴実也(東洋研究所) 吉村武典(大東文化大学) 中村菜穂(大東文化大学)	7月8日	大東文化会館	17名					
3	研究会メンバーによる研究打ち合わせ		10月21日	大東文化会館	10名					
4	・「イランの店舗用益権にかんする研究の経験から—サルゴフリー方式賃貸契約—」 ・「原隆一・南里浩子編 『大野盛雄 フィールドワークの軌跡Ⅲ「米の道」—稲作から米料理まで—』の編集進捗状況について」	岩崎葉子(アジア経済研究所) 原隆一(大東文化大学)	11月18日	大東文化会館	14名					
5	・「アフガニスタンの地域社会と開発」 ・「バシュトゥーンの言語・文学をめぐる状況と諸課題」 ・「国際支援とジェンダー秩序の変容—アフガニスタン女性警察支援の取り組み」	林 裕(福岡大学) 登利谷正人(上智大学) 藏田明子(大東文化大学)	2月17日	大東文化会館	13名					
所属研究員の活動										
No.	学会等での発表									
1	中村菜穂 ・2018年7月20日、セビア大学、「Persian Poetry in Exile: Nader Naderpour's "vatan" and "ghorbat", 5th World Congress for Middle Eastern Studies ・2019年1月13日、京都大学、「近代イランにおける抵抗の歌—アーレフ・ガズヴィーニーの「祖国(vatan)」をめぐって」中東現代文学研究会 ・2019年3月30日、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所、「イランの民衆詩についての—考察—セイエド・アシュラフディーンの子守唄—」第38回イラン研究会									
2	吉村武典 ・2018年7月20日、セビア大学、「The urban life, public sphere and its concept in the Muslim cities: an analysis of Sabil-Kuttabs in historic Cairo», 5th World Congress for Middle Eastern Studies ・2019年3月21日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「歴史的都市カイロの発展と水施設: 地図情報と叙述史料からの考察」、フィールドネット・ワークショップ「地理情報から読み解く歴史: イスラーム史におけるGISの活用」									
No.	刊行物等									
1	中村菜穂 ・「異郷のペルシア語詩—ナーデル・ナーデルブルの祖国(vatan)と異郷(ghorbat)」「ワタン(祖国)とは何か 中東現代文学におけるWatan/Homeland 表象」科学研究費補助金基盤研究B(2015-2018)現代中東の「ワタン(祖国)」の心性をめぐる表象文化の発展的研究(代表: 岡真理) 成果報告書 ・「近代イランの抵抗の歌の起源をめぐって—アーレフ・ガズヴィーニー(1878頃-1934)における詩的言語についての—考察」『東洋研究』第211号(2019年1月)									
2	ソレマニエ貴実也 ・「カーニャール朝(1796-1925)における都市文化と文化的変化がテヘランの住宅設計と建築様式に与えた影響」『東洋研究』第208号(2018年9月)									
3	林 裕 ・「だれにとつての「リアリティ」なのか—アフガニスタンにおける平和構築と開発援助—」『東洋研究』第210号(2018年12月)									
4	吉田雄介 ・「イラン観光産業への期待と不安—中東地域におけるイラン訪問外国人観光客数の地理的動向—」『イラン研究(大阪外国語大学地域文化学科ペルシア語専攻)』15号(2019年3月)、106-128頁									
5	吉村武典 ・“al-Ashkal wa-tarz al-tawthiq al-'adali: maqaranah bayna Fas wa Tunis (法的文書に関する形式と様式: フェスとチュニスの比較)”, Ribat Al Koutoub, 2019 (Web)									

岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」				
研究班の活動				
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数
1	・「江戸料理と八百善」（依田 徹 天心研究班・公益財団法人 遠山記念館学芸員） ・天心班動向（田辺 清） ・鵬の会動向（塩出明彦） ・天心研究会動向（天心研究班・岡倉登志） ・大東大動向（天心研究班・宮瀧交二）	8月9日	大東文化会館 K404 研修室	天心 研究班 6名 鵬の会 7名
2	・「岡倉天心の近代化・産業革命観—岡倉天心とウィリアム・モリス」（篠永宣孝 天心研究班・大東文化大学教授） ・書評（宮瀧交二：佐藤志乃著『パンカラの時代』） ・鵬の会動向（宮瀧交二・塩出明彦） ・天心研究班動向・展覧会「石から生まれた仏たち」紹介ほか（田辺 清）	2月23日	大東文化会館 K404 研修室	天心 研究班 6名 鵬の会 6名
所属研究員の活動				
No.	学会等での発表			
1	佐藤志乃（天心研究班・公益財団法人 横山大観記念館学芸員） 日時 2018年11月8日（木） 場所 大東文化会館 K-302 研修室 参加者 天心研究班・鵬の会メンバー他15名 テーマ 日本画の巨匠—横山大観と東洋思想— 内容 大観の画業に焦点を当てながら東洋的精神が、いかに継承されていたのかを作品を読み解き、大観の言説を取り上げる事により考察する。			
No.	刊行物等			
1	佐藤志乃（天心研究班・公益財団法人 横山大観記念館学芸員） 書名 「パンカラの時代—大観、未醒らと日本画成立の背景」 概要 西洋文化に心酔するハイカラと自らのナショナルリティを重視するパンカラの軋轢の時代でもあった明治の価値観に近づくことで大観と未醒の画業の光と影をみつめる。 出版社等 人文書院 発行年月 2018年8月30日			
南アジアにおける包摂と排除				
研究班の活動				
No.	研究会	開催日時	開催場所	参加人数
1	・「南アジアの農村社会と出稼ぎ」（須田敏彦） ・「マイノリティの経営参入の実態と課題」（篠田 隆）	4月24日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階小会議室	6名
2	・「ヒンディー語・ウルドゥー語学習の現状—インドのいくつかの大学・教育機関におけるヒンディー語・ウルドゥー語学習の現状の分析と考察—」（石田英明） ・「インド・グジャラート州における中小零細企業経営者の出自および属性の分析」（篠田 隆） ・「[芸能]の担い手としての南インドのパラモン階層：独立期の社会的変化に焦点をあてて」（小尾 淳） ・「タミルナドゥ州における宗教と音楽をめぐる政治」（井上貴子） ・「パングラデシュ・コミラ県における現地調査報告—中学生を対象とした進路希望アンケートの分析」（須田敏彦）	12月18日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階小会議室	6名
3	・「共棲」の理論（井上貴子） ・「インドにおける食料消費・食習慣の変化と宗教・社会集団」（篠田 隆） ・「パングラデシュにおける若者の将来像—中学校高学年を対象としたアンケート調査の結果」（須田敏彦）	2月13日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階小会議室	6名
No.	その他	開催日時	開催場所	参加人数
1	・JNU大学院生との研究交流会（2018年8月20日開催）の事前打ち合わせ	9月18日	東松山キャンパス 管理棟3階 ロビー	5名
所属研究員の活動				
No.	学会等での発表			
1	篠田 隆 日時 2018年10月28日 場所 京都大学 稲盛財団記念ホールでのシンポジウム報告（国内） 参加者 100名 テーマ 「インドにおける家畜経済の展開と家畜観の変容」 内容 【感覚からみるインド世界—動物・生業・芸能】の一環として、インドにおける家畜経済の展開と家畜観の変容についてグジャラート州の事例に基づき報告した（日本語） 日時 2019年1月24日 場所 インド、アーメダバード市グジャラート大学での特別講演（国外） 参加者 90人 テーマ Food and Identity among the Students of Gujarat Vidyapith 内容 インド人学生の食習慣の変化について現地調査に基づき報告した（英語）			
2	井上貴子・野火杏子 日時 2018年5月26日 場所 東北大学川内北キャンパス テーマ 「聖と俗のはざままで〈愛〉を歌い踊る—クリシュナ神をめぐる断章—」（日本南アジア学会設立30周年記念連続シンポジウム仙台大会「南アジアにおける表象と身体」）			
No.	刊行物等			
1	篠田 隆 書名 「インドにおける経営者集団の形成と系譜：グジャラート州の宗教・カーストと経営者」 概要 植民地時代から現在までのインドにおける経営者集団の形成と系譜についてグジャラート州の宗教・カーストと経営者を事例として動向分析を行った。 出版社 日本評論社 発行年月 2019年2月			

〔国際交流講演会〕 日本でのハラールの状況

大東文化大学非常勤講師 ムハマド・ズベル

2019.2.23(土)10:00～11:30 大東文化会館3階 K-0302 研修室

海外からの観光客が増加する中、日本でも「ハラール」食に対する関心が高まっています。ハラールはアラビア語で「許されている」という意味があり、食べ物の場合、イスラムの教えや法の中で口にすることを許されているものという意味があります。イスラムの聖典であるクルアーンやハディースでは、豚やアルコールを禁止しています。

ピュー研究所の2010年の研究によるとイスラム教を信仰する人々の数は約16億人にのぼり、キリスト教に次ぐ世界第2位の信仰者がいる宗教です。ムスリムは世界の49カ国で人口の大多数を占めています。その中でも最もムスリムの多い国がインドネシアで、パキスタンがそれに続きます。

日本にはムスリムの人口が少なく、25万人から30万人の間だと言われていますが、増加傾向にあります。1988年、私が来日した頃日本には2つのモスクしかありませんでしたが、現在の日本には

80以上のモスクと仮設モスクがあります。

同じように1988年、日本にハラールフードショップは一軒もありませんでしたが現在は全国にハラールフードショップがあります。これによりムスリムの人々がハラールの肉製品や他のハラール食材を入手するのは簡単になりましたが、ハラール認証を受けている飲食店を探すことは難しいままです。

日本では外国人観光客が増えており、政府は東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には4千万人もの観光客を見込んでいます。そんな中、イスラム国家からのムスリム観光客の数も徐々に増え続けています。今後、ハラールの食事の需要が大幅に増加することが予想されます。

東京都内でハラールの食事を提供している店の数は増加していると言われてはいますが、その速度はとても遅いです。ハラールの飲食店の数を増やすことは日本をムスリムに優しい国にするための重要な一歩となります。日本の観光業界はハラールレストランを増やため、より多くの努力をするべきでしょう。



2019年度 研究所 名簿

■名簿

管理委員会委員 (10名)

- 1 岡崎 邦彦
- 2 山田 準
- 3 小林 春樹
- 4 田中 良明
- 5 浜口 俊裕
- 6 中林 史朗
- 7 宮瀧 交二
- 8 篠永 宣孝
- 9 滝口 明子
- 10 田辺 清

専任研究員 (4名)

- 1 岡崎 邦彦 (所長)
- 2 山田 準
- 3 小林 春樹
- 4 田中 良明

事務室 (2名)

- 1 岡本 禎郎
- 2 宮本 恵

兼任研究員 (24名)

- 1 浜口 俊裕
- 2 中林 史朗
- 3 小塚 由博
- 4 高橋 睦美
- 5 宮瀧 交二
- 6 村井 信幸
- 7 篠永 宣孝
- 8 J アバイ
- 9 齋藤 俊輔
- 10 藏中 しのぶ
- 11 田中 寛
- 12 齊藤 哲郎
- 13 藏田 明子
- 14 篠田 隆
- 15 柴田 善雅
- 16 須田 敏彦
- 17 滝口 明子
- 18 小尾 淳
- 19 石田 英明
- 20 井上 貴子
- 21 田辺 清
- 22 鹿 錫俊
- 23 吉村 武典
- 24 高田 茂臣

兼任研究員 (63名)

- 1 相田 満
- 2 芦川 敏彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鏡屋 一
- 5 安保 博史
- 6 荒井 礼
- 7 生田 滋
- 8 池田 久代
- 9 石井 啓一郎
- 10 石坂 晋哉
- 11 出田 恵史
- 12 伊藤 一彦
- 13 今井 秀和
- 14 上野 英詞
- 15 植松 希久磨
- 16 江崎 隆哉
- 17 王 宝平
- 18 岡倉 登志
- 19 岡本 佳子
- 20 小川 陽一
- 21 オレグ・プリミアーニ
- 22 片岡 弘次
- 23 菅野 友巳
- 24 小坂 眞二
- 25 小島 麗逸
- 26 小林 龍彦
- 27 小林 敏男
- 28 近藤 邦康
- 29 斎藤 正道
- 30 笹生 美貴子
- 31 佐藤 志乃
- 32 嶋 亜弥子
- 33 進藤 英幸
- 34 鈴木 珠里
- 35 鈴木 真弥
- 36 ソレマニエ 貴実也
- 37 高木 ゆみ子
- 38 高橋 あやの
- 39 中島 宏
- 40 中村 聡
- 41 中村 士
- 42 中村 菜穂
- 43 成田 守
- 44 南里 浩子
- 45 布村 浩一
- 46 濱 久雄
- 47 林 裕
- 48 原 隆一
- 49 日吉 盛幸
- 50 深見 和子
- 51 舟橋 健太
- 52 フレデリック・ジラルール
- 53 細井 浩志
- 54 増木 優衣
- 55 松本 公一
- 56 三田 明弘
- 57 ムハマド・ズベル
- 58 矢ヶ崎 善太郎
- 59 山下 克明
- 60 由川 稔
- 61 吉田 雄介
- 62 依田 徹
- 63 渡邊 義浩



『藝文類聚』(巻47) 訓讀付索引

大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林 史朗

2019年2月25日発行／B5判 45, 35頁／ISBN 978-4-904626-34-4／頒価 3,000円(税別)

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

歴史研究者からの要望に伴い、巻45以降職官部の読解に着手している。

本巻には『藝文類聚』巻47 職官部3(大司馬 司徒 司空 儀同 特進)の訓読文・校異・注(典故)・索引を収めている。

《既刊》巻1～16、巻45～46、巻80～89



『茶譜』巻11(上) 注釈

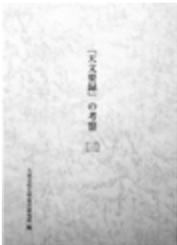
藏中しのぶ、相田 満、安保 博史、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、
笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラルル、松本 公一、三田 明弘、
矢ヶ崎 善太郎 共著

2019年2月26日発行／B5判 200頁／ISBN 978-4-904626-36-8／頒価 11,000円(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本(国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本)すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。

《既刊》巻1～巻10



『天文要録』の考察 [三]

大東文化大学東洋研究所「天文」研究班 代表 小林 春樹

2019年2月25日発行／B5判 98, 5頁／ISBN 978-4-904626-35-1／頒価 3,000円(税別)

初唐高宗の麟徳元年(664)に李鳳によって撰述された天文書であり、現在は日本の前田尊経閣文庫のみに現存する貴重な佚存書である『天文要録』の巻四「日占」の後半部分を対象として訓読、訳注、さらには現代語訳、および専門的コラムである「余説」を施した。

《既刊》『天文要録』の考察 [一]、[二]

第208号 (2018年9月25日発行)

- 渡邊 義浩／「史」の文学性——范曄の『後漢書』
田中 良明／虹蜺初論
篠田 隆／インドにおける食料消費・食習慣の変化と宗教・社会集団
—「インド人間開発調査」個票データの分析—
ソレマニエ 貴実也／ガージャール朝期 (1796-1925) における都市化と
文化的変化がテヘランの住宅設計と建築様式に与えた影響

第209号 (2018年11月25日発行)

- 笹生 美貴子／豊子愷訳『源氏物語』「若紫」巻の注釈態度における一考察
篠永 宣孝／岡倉天心の近代化・産業革命観 ——岡倉天心とウィリアム・モリス——
柴田 善雅／満州における日系株式取引所の設立
中村 士^{つこう}／天文学者山本一清の「日本理学史会」 ——日本科学史学会創立への手掛かり

第210号 (2018年12月25日発行)

- 小坂 眞二／神祇と陰陽道 (二)
小塚 由博／張潮と王士禛の交遊関係 ——編集状況を手がかりに—
中村 聡^{さとし}／約翰福音書冒頭のロゴスをめぐって
—漢訳、日本語訳『聖書』の翻訳とその思想的背景—
林 裕／だれにとっての「リアリティ」なのか
—アフガニスタンにおける平和構築と開発援助—

第211号 (2019年1月25日発行)

- 相田 満／相書に見る声で定命を知る平安時代の観相譚
—『今昔物語集』巻六第48の延命譚を敦煌文書と比較して分析する
高木 ゆみ子／藤原頼長と音楽 ——『台記』を中心に (三) 康治・天養年間
布村 浩一／『詩序集』の「二聯之詩篇」について ——絶句か、聯句か、摘句か—
中村 菜穂／近代イランの抵抗の歌の起源をめぐって
—アーレフ・ガズヴィーニー (1879頃-1934) における詩的言語についての一考察

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 2号館 B1
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-5-4
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平 1-10-2
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

2019年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月7日(木) 13:00～15:00 ポルトガルのアジア進出と 植民地社会の形成 —インディア領の多民族性を めぐって— 東洋研究所 兼担研究員 大東文化大学外国語学部英語学科 特任講師 齋藤 俊輔</p>	<p>16世紀ポルトガルは海上ルートを通じてアジアに進出しました。ポルトガルがアジアに進出したのは、交易の利益やキリスト教の布教だけでなく、植民地を形成し、広げることも目的でした。ポルトガルは16世紀のはじめに「インディア領」と呼ばれる植民地を形成します。本講座では、このインディア領の社会について具体的に紹介していきます。そして、紹介を通じて、ポルトガルがアジアのさまざまな民族からなる社会を形成していたことを明らかにしたいと考えています。</p>
<p>11月14日(木) 13:00～15:00 お茶を愉しむ ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化～ 東洋研究所 兼担研究員 大東文化大学国際関係学部国際関係学科 教授 滝口 明子</p>	<p>茶は「アジア発の世界飲料」と呼ばれます。中国や日本でも古くから親しまれ、生活に欠かせない飲み物となってきました。17世紀にヨーロッパへ伝わった「アジアの葉」は、どのように受け入れられ、定着していったのでしょうか。 本講座では絵画と茶道具を手がかりにしつつ、植民地主義の時代の西欧、特にイギリスにおいて茶が日常生活の必需品となり、アフタヌーン・ティーなどの習慣が生まれる過程を辿ります。茶をとおして東西文化交流史研究の意義と面白さについても考えてみたいと思います。</p>
<p>11月21日(木) 13:00～15:00 コーヒー文化とオランダ ～オランダ東インド会社の コーヒー文化への貢献～ 東洋研究所 専任研究員 東洋研究所 教授 山田 準</p>	<p>日本文化には、カフェ文化があり、近年多くのコーヒーショップができて、すっかりコーヒー文化が根付いている。このコーヒー文化の発展の歴史には、オランダ東インド会社の植民地政策と深い関係があります。本講座においては、コーヒー文化の発展とオランダ東インド会社との関係について、ヨーロッパへの伝播や日本への伝来について、多文化共生の観点に立って、植民地主義についての再考の一端を考察してみます。</p>

■会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室

■受講料：無料

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

■定員：50名(先着順)

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所

TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※ 注意事項

- ・受付は先着順とさせていただきます。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.71

2019年7月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>